

ART KISS LETTER

TITLE

第34回熊本市民美術展
熊本アートパレード

DATE

2023

1.7[㊥] / 1.22[㊦]

開館時間 10:00-20:00
(最終日は17:00閉場)

休館日 火曜日



本年度テーマ

「20(にじゅう)」

出品数

230点

審査員
講評

熊本市現代美術館長
日比野克彦



本年度は熊本市現代美術館が開館して20年目の節目となることから、テーマを「20(にじゅう)」としました。今回、「20」というテーマに対する様々な作品としての応答を見せていただきました。上位入賞作品は、テーマを直球でとらえたというよりも、「20」をコンセプトや作品づくりのきっかけにして、そこから展開された作品を選定しました。ゆえにパッと見ただけではわからないものもあるかもしれません。

入賞作品の中には、例えば「20秒で描いた作品」や、「20年前の自分の作品とコラボしたもの」など、柔軟な発想や意外性があった驚きました。こういう着眼点をもって、実際に手を動かして描いてみるというのはとても大事です。上位4賞はその中でも個性が際立っていました。大賞は16歳という時でないときできない作品でしょう。おそらく綿密に形をスケッチするわけではなく、新聞紙やガムテープなど身近な素材を使って、アイデアから一気に作りきったのであろうエネルギーが感じられます。その他にも技術の高い作品、自分の過去の心象に思いをはせた作品、また障害のある当事者の家族の視点から見た作品など多様性がありました。

私自身も作品を制作したり、あるいは社会的な課題に対してアートを通して向き合う時に「心が動く瞬間」というものを大事にしています。その気づきを、ほんの少しの勇気をもってかたちや言葉で表してみることで、他者や世界と対話し、つながっていくことができるのではないのでしょうか。



審査員特別賞(日比野克彦賞)

内田満男

20の
スペクトラム
(連続体)



作者には自閉スペクトラム症を持つ家族があり、その20年の成長を1年1マスに見立てて描いているという。当事者の作品はよく見るが、その家族が表現に取り組むのはユニークだ。

井手宣通賞

大淵裕佳里

20歳に見た夢



20年前の記憶を絵画化した作品。独特な色彩だがうまく調和している。描きなれて厚塗りや薄塗りのバランスがとれている。描線の間に見える地の白が生きていて、抜け感を生んでいる。

熊本市現代美術館賞

堀川仁彦

what came out from 20
20から出て来た物

二重のイメージを立体的にあらわす作品は時折見かけるが、テーマを読み解き形に落とし込む基本的なテクニックが高い。欲を言えばキャラクターの設定やこだわりを深めるとより個々の作品に連続性が出てくるのではないだろうか。



アートパレード大賞

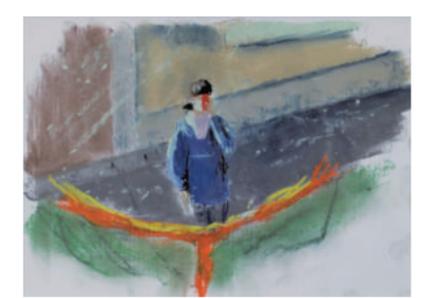
審査講評:日比野克彦

帰り梅雨。

Eros菩薩

一方は口がふさがれ、他方は目がふさがれている。幽体離脱しているようにも見える。明と暗のようにも感じるが、実は一方だけでは、成り立たないのかもしれない。そういった相反する心情をパワフルに外在化させた16歳の作品。自分の心象をうまく形にすることに成功している。

優秀賞



志見祥
カーブミラーに
映る自分

自分(一重目)とミラーに映る自分(二重目)は同じようだが違う。それを写真に撮り(三重目)、さらに描く(四重目)。自己評価と他者評価のように少しずつズレていく存在に着目した。シンプルだがユニーク。



Rin
重なり合う大三角と
ダイヤモンド

大学生の頃、田舎道に寝ころび見た流星群の感動。それ以来、夜空を幾度となく見上げているという。今回は冬の大きな大三角とダイヤモンドの重なりを「20」に結びつけたという。思わずのぞき込んで探してしまう作品。



上條睦子
わかるかな
~熊vege 20~

転居を機に目覚めた熊本産野菜のおいしさを表現しようと20種類をスライスして作品化した「押し野菜」。アルミ密封処理という技術の進化が、表現の幅を広げている。



服部ちか子
デュエット

20年前に描いた作品に新たに枠をつけて、好きなパンジーとピオラを描いたという作品。昔の作品をより良くしようと手を入れるということはあるだろうが、互いの良さを認め「コラボする」という発想が作者ならではの。



ゴブリン
orto2

ほとんど絵を描いたことがないという作者が、100均の絵の具やスポンジを使い「20秒で描いた作品」。アクティブでアスリートの面白さを感じた。連作が20枚くらいあったりすると更に良かったかもしれない。

奨励賞

東堤愛依璃

wear

少年少女2人と18匹の動物たち。娯楽や装飾のための毛皮や衣服を捨てて、装飾のない自然そのものの姿を表しているという。描写力や構成力は高い。ただし単に綺麗／上手で終わってはもったいない。絵画を通して世界の持つ複雑さや矛盾に果敢に向き合っていて欲しい。



吉本伴江

わっ ふえてる

昔ながらの体重計を思い出しながら描いたという。目盛りは20キロあたりをさす。小学校に上がるくらいの女の子だろうか。誰も少なからず経験があるだろうというシーンが明るく描かれていて楽しい。



内山佳恵

軌跡

10才になる娘の後ろ姿。初めての子育てで一緒に色々な事を乗り越えてきたという2人の10年(10×2=20)を重ねたという。植物が細かく描き分けられ、透明感のある明るい色彩もよい。



永田剛

二重生活をする男

「20」というテーマからクラーク・ケント扮するスーパーマンを描こうという発想が面白かった。シンプルに対象を描いたポートレートを、折り目正しくフレームに入れて展示する手法もインパクトやユーモアがある。



山口紗瑛

20歳の彼

20歳の彼を20枚描く。写真を撮る数秒とは比べ物にならない、絵の具が乾くまでの長い時間をかけて対象をみつめる。青春時代ならではの情熱が感じられる。これがもし40歳、80歳、120歳…と続いたとしたら?他にない個性をもった作品になっていくのではないかと。



加藤滋

気球

気球の写真を見ながら「自由にどこかにいけたら」と思って描いた作品だという。対象以外描かない潔さがよい。全体における配置が絶妙で、ふわっと浮かぶ空気感が感じられる。余白を味わう作品なのかもしれない。



中村太湯

絲(人の出会いは不思議)

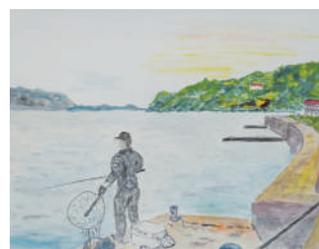
十重二十重に重なる人との出会いの素晴らしさを「絲」の甲骨文字で表した作品。たった一つの文字から様々なイメージがひろがっていく。墨のにじみやグラデーションも心地よく美しい。



冠 夏輝

音(sound)

左右両方に「音」という文字が描かれている。文字は人の姿のようにも見える。私たちが普段聞いている音楽も、音が二重三重となって一つの楽曲になると作者は言う。書でもありキャンバスに描いた絵でもあるという意味で多層性のある作品だ。



前田積男

釣れたら二重の喜び

「夕日が美しい時なのに…」とコメントに書かれている。作者自身の姿だろうか、素朴な釣りの風景である。美しい景色にさらに釣果があれば言うことはないだろうが、それを絵に描くことで、作者はまた別の小さな喜びを感じているのではないかと。



大畑義弘

二重三重に見えにくい手

「支援が必要な子供が世界中にいることは知っているが、実際のどのくらい必要なかをあまり知らない」と作者は言う。その状況を重なりあった格子で表し、白の中に赤をきかせ、巧みに印象づけている。

熊本市現代美術館

Contemporary Art Museum, Kumamoto

ART KISS LETTER Vol.106(2023年1月)

編集：坂本顕子 佐々木玄太郎 デザイン：apuaroot

印刷：シモダ印刷 発行：熊本市現代美術館 www.camk.jp

〒860-0845 熊本市中央区上通町2-3 Tel 096-278-7500

[来館者の皆さまへのお願] 新型コロナウイルスの感染拡大を防止し、美術館を安全にご利用いただくため、ご来館の際には手指消毒・咳エチケットのご協力を願っています。また、発熱・咳・くしゃみ等の風邪の症状がある方は、ご来館をお控えください。

